令和６年度

「外部有識者会議」報告書

令和６年９月

福井工業高等専門学校

まえがき

福井工業高等専門学校外部有識者会議では、本校の現状と課題、そして今後の方向性について、産業界、教育界、地域社会などの各分野から多角的な視点で討議が行われました。令和７年、創立６０周年を迎える本校の教育活動は、時代とともに高度化しており、昨年度、スタートアップ教育環境整備事業の一環として最新の設備を備えた起業家工房が整備されるなど、アントレプレナーシップ教育への環境整備も進んで参りました。さらに、高度情報専門人材の育成を見据えて、従来の５学科体制から１学科５系９コースへの大幅な改組計画を申請しております。この改組は、高度情報専門人材育成に対する社会的な要求の高まりを受け、時代の要請に応え、かつ地域社会の皆様の要望に応えるべく、高度な専門性を有する人材を育成するため、従来型の専門教育と高度情報専門人材の育成を両立させたカリキュラムの実施を目指したものです。このような背景のもと外部有識者会議では、改組、増募対策、学生の地元定着率向上等について多くの建設的な意見が交わされました。

学科改組については、新たな学科構成やカリキュラムの導入により、従来の専門性に加え高度情報人材育成の重要性が認識されたほか、文理融合の重要性についても、多様な意見が寄せられております。改組を機に文理融合の視点を取り入れた教育を推進することで、学生が多様な視点を持ち、柔軟に対応できる技術者として成長することが期待されます。

また、増募対策並びに女子学生の増募に関しても貴重なご意見を頂いております。オープンキャンパス等を通じて中学生のみならず保護者にも本校の魅力を伝えるべく努力を継続し、多くの中学生が理系分野に興味を持てるような入口側への広報活動に今後も取り組んで参ります。

さらに学生の地元定着率向上についても多くの提案がなされております。インターンシップの受け入れの拡大などを通じて、学生に地元企業の魅力を伝え、就職の動機付けを図ることで、長期的には地域経済の活性化に寄与することが期待されます。

今回の外部有識者会議では、多くの貴重なご意見、ご提言を頂いております。ご多忙の中ご参加いただいた委員の皆様には心より御礼申し上げます。ご教示いただきましたことを参考にしながら福井高専として第５期中期計画に向けた教育・研究活動を進めてまいる所存でございます。

独立行政法人　国立高等専門学校機構
福井工業高等専門学校
校長　長谷川　章

目　　次

まえがき

Ⅰ．福井工業高等専門学校外部有識者会議規則・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

Ⅱ．外部有識者会議委員名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3

Ⅲ．本校出席者名簿・・・　4

Ⅳ．外部有識者会議日程・・　5

Ⅴ．全体討論・講評・・・　7

Ⅵ．参考資料・・・　３１

概要説明資料「福井高専の現状と課題」

・本校の概要（総務・企画主事）

・本校の教育（教務主事）

・総括（校長）

・将来構想と改組（校長、総務・企画主事）

Ⅰ．福井工業高等専門学校外部有識者会議規則

平成16年5月13日規則第21号

改正　平成16年 6月 3日規則第23号　平成19年 2月 1日規則第 1号
平成21年 3月30日規則第 2号　平成27年 7月22日規則第18号
令和元年12月10日規則第29号　令和 2年 3月26日規則第17号

（設置）

第１条　福井工業高等専門学校（以下「本校」という。）に、広く学外有識者の意見を聴くための組織として、福井工業高等専門学校外部有識者会議（以下「会議」という。）を置く。

（任務）

第２条　会議は、本校の教育研究目標・計画、自己評価、その他本校の運営に関する重要事項について、校長の諮問に応じて審議・評価し、及び校長に対して助言又は勧告を行う。

（組織）

第３条　会議は、10人以内の委員で組織する。

２　委員は、本校教職員以外の者で高等専門学校に関し広くかつ高い識見を有する者のうちから校長が委嘱する。

３　委員の任期は、1年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任の任期は、前任者の残任期間とする。

（議長）

第４条　会議の議長は、委員の互選により定める。

（会議の開催）

第５条　会議は、校長が招集する。

２　会議は、3年に1回以上開催するものとする。

３　会議は、必要に応じて関係者の出席を求め、その意見を聴くことができる。

（守秘義務）

第６条　委員は、その役割を遂行する上で知り得た情報を、正当な理由なく漏えいしてはならない。

（事務）

第７条　会議の事務は、総務課が処理する。

附　則

この規則は、平成16年5月13日から施行する。

附　則（平成16年6月3日改正）

この規則は、平成16年6月3日から施行する。

附　則（平成19年2月1日改正）

この規則は、平成19年2月1日から施行し、平成18年10月1日から適用する。

附　則（平成21年3月30日改正）

この規則は、平成21年4月1日から施行する。

附　則（平成27年7月22日改正）

この規則は、平成27年7月22日から施行し、同年4月1日から適用する。

附　則（令和元年12月10日改正）

この規則は、令和元年12月10日から施行する。

附　則（令和2年3月26日改正）

この規則は、令和2年3月26日から施行する。

Ⅱ．外部有識者会議委員名簿

（高等教育機関の教員等及び経験者）

鎌土重晴（かまどしげはる）　長岡技術科学大学　学長

（高等教育機関の教員等及び経験者）

末信一朗（すえしんいちろう）　福井大学　副学長（研究、産学・社会連携担当）

（本校の所在する地域の教育関係者）

水野克己（みずのかつき）　福井県中学校長会　会長
（福井市光陽中学校長）

（地方自治体等研究機関の研究者等）

川邊和正（かわなべかずまさ）　福井県工業技術センター　所長

（産業界の有識者）

加藤団秀（かとうあつひで）　鯖江商工会議所　会頭

（産業界の有識者）

加藤大紀（かとうだいき）　信越化学工業(株) 武生工場長

（報道機関の有識者）

山本道隆（やまもとみちたか）　(株) 福井新聞社　常務取締役

（本校関係者）

野嶋祐記（のじまゆうき）　福井工業高等専門学校同窓会（進和会）会長

Ⅲ．本校出席者名簿

校　　長	長谷川　　章	
総務・企画主事（副校長）	辻　子　裕　二	（環境都市工学科教授）
教務主事（副校長）	藤　田　克　志	（機械工学科教授）
学生主事（校長補佐）	吉　田　雅　穂	（環境都市工学科教授）
寮務主事（校長補佐）	斉　藤　　徹	（電子情報工学科教授）
研究産学連携主事（校長補佐）	松　井　栄　樹	（物質工学科教授）
専攻科長（校長補佐）	芳　賀　正　和	（機械工学科教授）
機械工学科長	亀　山　建太郎	
電気電子工学科長 （代理：創造教育開発センター長）	米　田　知　晃	
電子情報工学科長	小　越　咲　子	
物質工学科長	西　野　純　一	
環境都市工学科長 （代理：地域連携テクノセンター長）	辻　野　和　彦	
一般科目教室主任	東　　章　弘	
図書館長	原　口　　治	（一般科目教室教授）
総合情報処理センター長 （代理：副センター長）	堀　井　直　宏	（電子情報工学科准教授）
教育研究支援センター長	青　山　義　弘	（電子情報工学科教授）
事　務　部　長	伊　藤　幹　雄	
総　務　課　長	大　野　速　太	
学　生　課　長	田　中　賢　一	

Ⅳ．外部有識者会議日程

１．日　時　　令和６年９月５日（木）１３：３０～１７：００
２．場　所　　福井工業高等専門学校　管理棟２階　大会議室
３．会　議　次　第
　一　開　会
　一　校長挨拶
　一　出席者の紹介
　一　議長選出
　一　議　事
　　１．本校の概要等説明等
　　―　休　憩　―
　　２．全体討論・質疑応答
　　―　休　憩　―
　　３．講評・提言
　一　校長謝辞
　一　閉会
４．資料
＜会議資料＞
　１．令和４年度外部有識者会議における各委員からの意見・提言
　２．福井工業高等専門学校第４期中期計画
　３．令和４年度年度計画実績報告
　４．令和５年度年度計画実績報告
　５．福井工業高等専門学校第５期中期計画
　６．概要説明

＜参考資料＞
　①　自己点検・評価報告書（令和５年度）
　②　学校要覧　２０２４
　③　学生便覧（２０２４年度版）
　④　福井高専の歩き方　－　２０２５ College Guide －

⑤　ＪＯＩＮＴ　２０２４　－地域連携テクノセンター活動紹介誌－

⑥　専攻科パンフレット　２０２５　＊

⑦　福井高専からはじまるキミの未来　＊

・資料は、＊マーク資料を除き、iPad 掲載の電子データにて配布。

Ⅴ．全体討論・講評

（末議長）　皆さんお揃いでしょうか。それでは全体討論に入りたいと思います。全体討論の時間は１６時までとなりますので１時間を目途に行いたいと思います。

最初に、先ほどのご説明に関連して高専さん側から補足することがあればお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいですか。

（長谷川校長）　大丈夫です。

（末議長）　それでは続きまして、先ほどの高専さん側からのご説明や配布資料等につきまして、委員の方からご質問、ご意見、ご感想があればお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

（鎌土委員）１つだけよろしいですか。同じかも分からないんですが。

（末議長）　どうぞ。

（鎌土委員）今、卒業生の方はもう６０倍から１００倍で、引く手あまたで就職に関しては心配ないという状態だと思いますが。こと県内のパーセンテージとかは。たぶん６０倍、１００倍はやはり全国の話かなと思いますが。

（藤田教務主事）　昨年度はだいたいどの学科も求人数が１，０００社を超えていると。電気・電子は１，４００ぐらい。機械とか電子情報が１，３００ぐらいあると思います。ただ、福井県内はだいたい８０ぐらいになっています。これはコロナ禍の前も変わらないです。

全体の就職をいろいろ見てみますと、やはり求人数の割には福井県の定着は高いなと思っております。だいたい３割から４割弱ぐらいだとお考えいただくといいかと。以前調べた専攻科の学生に絞っていくと、４割が福井県内の企業とか自治体に就職しています。

コロナの令和２年前後ぐらいから県内指向が少し強くなっている傾向があります。それまで機械とか電気・電子は県外が非常に多かったんですが、コロナの前後ぐらいから県内企業に就職する人がちょっと増えてきた。ざっくりとそんな感じです。

（鎌土委員）　今ちょうど会頭ともお話ししていたんですが、我々としてもぜひ県内に就職していただきたいなと思うところです。それは我々の責任かも分かりませんが、その辺どうなのかなと思いまして。

長岡技術科学大学長
鎌土　重晴　氏

（藤田教務主事）　やはり県外の企業は動きが非常に早いというんでしょうか、人を採用する計画が非常に早くなります。ですので例えば１０月、１１月ぐらいにはもうその計画が出てきていて、私どもの方にもわざわざ求人に来ていただくというかたちです。それに比べて県内の企業は少し遅い動きになっているのかなと。どうしても最初から県内志望という学生はそれを待つ傾向があると思いますが、フリーというか、フラットというか、そういう県内でも県外でもという学生ですと、最初に出てきた候補から選んでいくというかたちです。

それからもう１つ、お願いしたいと思っているのは、本科ですと４年生の夏休みにインターンシップを行っております。インターンシップに行った企業をまず軸に就職を考えていくというのがここ最近の学生の傾向かなと思います。ですので４年生のインターンシップを、私どもも積極的に学生を出していきたいと思っておりますし、企業さんのほうもぜひ受け入れをお願いしたいと思っております。

（鎌土委員）　それは、生徒さんのほうからもインターンシップに行かれて、ぜひこの会社という要望が出てくると。

（藤田教務主事）　そうです、そうです。やはりそういうことがちょっと多くなってきたかと。

（鎌土委員）　そうですか。

（藤田教務主事）　２０年ぐらい前ですと、そこにズレが生じていたんですが。ここ５年、６年を見ていますと、どうしてその企業を選んだのかと聞くと、インターンシップに行ったからという学生がやはり多くなってきているなという感じです。

（山本委員）　先ほども言いましたが私どもは地元の媒体なので、企業さまと学生とはなるべく地元にというお話をさせていただきました。インターンシップですが、弊社の例で言いますと最近はインターンシップで来られた学生が実際に私どもに就職する率が高いです。

ただ、インターンシップも企業と学校側との条件がなかなか整わない場合もあって、期間とか、長くなればわれわれ企業のほうも負担が掛かります。そこは我々も変えていかないと、なかなかそういう効果が出てこないと思っています。

あと、これは会頭にお聞きしたいんですが、言葉をうまく選べないんですが、地元の優秀な会社ほど地元ではなくて外から採るのも多いですよね。地元、福井にいる学生ではなくて、先に外へ出ている学生さんを採ってしまうという傾向があるので。今ほどおっしゃられたように大手企業さんのほうが敏感に動いているという話もありますが、地元で上場企業が何社かありますが、もちろん県内の学生も非常に登用してもらって採用しているんですが、実はそこの企業も含めて外から採るのも多いので、特に何系とかという分け方じゃなく、だんだん採り方が変わってきているのかなと思います。

もう１つは、私どもは新聞社なんですが、たぶん高専さんはどちらかというと建築や技術、機械など、うちの会社がどうしてもふさわしくないと思われています。私はいわゆる文系とか理系という考え方がおかしいと思っていますが。高専の専攻科の中かららわれわれは採りたいんですよね。そうすると、そこの思いの中でもミスマッチがあるような気がしています。

話は飛ぶんですが、改組の中でデザインなど、要するに領域を超えてという組み合わせ、組み替えというのは私は非常に大事だと思っていて。どうしてもわれわれの概念の中で、自分の中で枠組みを決めてしまう。実は弊社側で言うと、われわれの人事担当も高専さんになかなかお投げ掛けをしていなかったということもあるので。ひょっとしたら、思いの中で求める側と就職したい側にミスマッチが起こっているんじゃないかと。

その中で、高専さんのこの改組のことも含めて、卒業生も含めていろいろなところで、いわゆる何々系ではなくていろいろなところで働いている例がもっと分かりやすくなってくると、欲しい会社のほうもいろいろなところが今年はあるんじゃないかと思います。

もちろん就職１００％というとなかなか、今度は採る側が狭き門になってくるんですが。もらっていくほうも本当にそうなんですが。われわれが勝手に既存の意識でもって向かい合っていると幅が広がっていかないのかなという気がします。先ほどのお話を聞いていてそういうことを思っています。現実、私どもの社としても御校となかなかご縁が最近ないということを考えていて。自分のところの例ばかりで申し訳ありませんが、県内のそういうマ ッチングをしている仕事をさせてもらっていると、そういう思いの中でズレがある、活動の中でズレがあるのかなと思いますので、ちょっと発言させていただきました。

（末議長）　では校長、お願いします。

（長谷川校長）　県内の求人に関して、我々の卒業生はなかなか数が多くないものですから、本当に地元の企業さんにはご迷惑を掛けているところではございます。一方、我々としましても女子学生をもっと増やしたいという思いがございます。女子学生を増やしていきたいという中で、女子学生さんはどうも理系はどうだとかという固定観念をわれわれも持っているし、生徒さんの親御さんももしかしたら持っていらっしゃるのかもしれないです。そういっ

たところで、まずは理系とか文系とかじゃなくて、自分でまず学校を見ていただいて、好きなものがあるかどうかという観点で学校を選んでいただけたらというのが１つでございます。

それからもう１点は、本校を卒業して地元の企業さんに就職されている方というのは比較的定着率がよくて、また優良な企業さんがたくさんございますので実は結構サラリーもいいかたちで就職されている方もいらっしゃいます。そういう意味では、われわれのＰＲがまだまだ不足しているところでもありますが、福井高専を卒業して地元の企業で働いて将来安心して生活していく、出産をしてそれからまた復帰されてということも十分可能なんだということを、われわれももうちょっと地元の特に女子生徒にＰＲしていく必要もあるのかなということは感じています。

あと、これは他の大学の取り組み等で聞きかじった話でございますが、就職を控えている学生さんに対して、大学と地元の企業さんが連携しながら企業見学ツアーをやるとかいった取り組みもあるように伺っています。やはりインターシップに行った企業だけという狭い視野ではなくて、いろいろなところをもっと見ていただきたいなという思いもございますので、そういうかたちでなんらか地元の企業さんと連携するようなかたちもあるのではないかなというのは、今お話を伺った感想でございます。ありがとうございました。

（末議長）　ちょっと私もご質問の件に関して補足の質問をしたいんですが。

今、山本委員のほうから文理融合の話がありましたが、やはり高専の一番弱いところは外国語であるとか文系的なところですね。もちろんそこを削って短い期間で大卒と同じような技術者を出していくところがあるので、どうしても文系の部分をある意味軽くしなければならないことはあるんだと思うんですが。

やはり今、この時代になってくるとデータサイエンスもしかりですが、文系的なものというんですか、感性というものを技術者が持っていないと世の役に立たないというか、対応していけない状況がもう完全に来ているわけですね。その意味で新しい改組案でもコース間の重なり、それはよく分かるんですが、それとは別にいわゆる文理融合。私はどちらかというと文理融合ではなくて、理が文のほうに寄っていくという意味で「理文融合」という言葉を使っているんですが。

そういう文理融合的な考え方というのは、高専の教育体制の中で厳しいとは思いますが、そういったものがうまく結び付いていくような考え方もありなのかなと。これからの高専を卒業した技術者の在り方というものを考えていく上で、理文融合といったような考え方もあるんじゃないかと、これは私の考え方ですがそう感じています。そういったところも何か考えていただけるといいかなと思います。

（長谷川校長）　ご指摘、ありがとうございます。今おっしゃったこと、とても大事なことでございます。文理融合の１つの考え方としては、私たち今日の改組の資料の中で、もしご覧になることができましたら改組の概要の一枚物をご覧いただければと思いますが、従来

数学、英語、国語といった科目を一般科目教室とさせていただいていますが、リベラルアーツ科というかたちで文理横断を推進するとうたっております。

これは具体的にどういうことをするのかといいますと、例えば末先生がおっしゃられるとおりに英語が弱い。でもわれわれ理系のほうからの英語のアプローチとしては、例えばグラフ１つの書き方を取っても、これを英語で表現するにはどうするんだとか。あるいは、英語のアブストラクトをつくりましょうというところに関して、英語の先生方のご協力をいただくとか。

今、さまざまな外部に向かって公開講座等をさせていただいておりますが。いわゆるSTEAM教育というお話を今日させていただいておりますが、STEAMのＡの部分ですね。これはアートという考え方もありますが、いわゆるリベラルアーツという一般科目的な部分、一般教養的なところも含めて考えていこうと。その中で学生さんたちがものづくりをしたり、それからまとめ上げて発表する。こういう活動は STEAM のＡのところがかなり強調されてくるのかなと考えております。

そういう意味で正課の部分に加えて、私たちは今日いろいろなアクティビティーがあるんだということでご紹介させていただいておりますが、そういう活動を通じながら一般教養的なところの強化を図っていかなければと十分に認識させていただいております。ありがとうございました。

（末議長）　それでは、その他。

（藤田教務主事）　すみません。

（末議長）　お願いします。

（藤田教務主事）　高専の学生が文系に弱いみたいなイメージがあるかもしれませんが、私どもの今の教育課程表の中には、５年生に選択必須科目というのを設けています。これは一般の先生方が講座を開講するということで、歴史学特講とか哲学とか、現代文の話とかそういうことをやっています。いわゆる大学で言う一般教養のことをまったくやっていないというわけではないです。

あと、例年私どもの学校は図書館が中心になりまして、学生がいろいろな文章を書く校友会編集の「青樹」というものを出しております。ああいうものを読みますと、高専の学生もなかなか捨てたもんじゃないなと思います。例えば新聞社に勤めるような学生が出てきていないのは確かなんですが、それはお互いに、うちも福井新聞社にアプローチしていないし、福井新聞社さんも福井高専にアプローチしていないという関係だから出てきていないんだと考えたほうがいいのかなと思いますが。

私は福井高専に勤めて３９年になるんですが、福井高専の学生は文系のほうが本当に弱い学生ばっかりかというと、そうじゃないと思います。小説を書くような学生ももちろんいますし、マンガを描くような学生も当然いるので、そこのところは普通の大学生と変わりがないかなと思います。以上です。

（末議長）　余談ですが、私の奈良高専のときの弟子ですが『日本国勢図絵』の編集長をやっている者がいまして。まさに総合力を持っていないとそういうことはできないんですが。確かに、理系でありながらそういう仕事に就いたりするのも割と高専ＯＢに多いんじゃないかなと思います。

（藤田教務主事）　たぶん、先ほど山本さんがおっしゃっていたように、理系、文系という分け方で分けないほうがいいと思います。それが違うんだと思います。現実にいる人はそんな分け方では分けられないということだと思いますね。

（末議長）　もともと高専生は総合力を持っていると思うんです。それをできるだけ固定概念に縛られることなく伸ばしていただきたいというのが私の質問の趣旨です。

ほかはいかがでしょう。加藤委員、お願いいたします。

（加藤団委員）　今ほど各委員の方からいろいろなご意見が出ていたんですが、まず鯖江の商工会議所といたしましては人材を求めています。そして、高専ご出身の皆さんが入られている会社の、特に丹南地域では定着率が非常に高くて即戦力になっているということも事実でございます。

ただし、隣にいらっしゃるのでとても言いにくいんですが、信越化学さんであるとか、村田製作所さんであるとかの大変強い企業さんのところにどうしてもなびいてしまいまして、小さくて技術力のある、小さくてもキラッと光るような企業をなかなか選んでいただけないという点がございます。ですのでもっともっと商工会議所と接点を持っていただいて、インターンシップも含めてそういう機会を増やしていきたいなと考えておりますのでご協力をいただきたいと思います。

鯖江商工会議所会頭
加藤　団秀　氏

実は今、ご存じのように jig.jp の福野君も会議所の常勤で頑張っていただいていますし、その他県内出身で高専生の皆さんの中で大変頑張っていらっしゃる方にたくさんご協力もいただいておりますので、知らないうちに高専の皆さん方とつながりを持っているのが現実ではないかなと考えております。それにつきましては大変ありがたいことなんですが。やはりこれは福井県全体を見ましてもそんなに人口がいる県ではございませんので、優秀な人材であればこそ、ぜひとも地元を勧めていただきたい。実は、今日はＰＲにやってまいりまして、それを言うためだけに今日来たみたいなものです。

先ほど福井新聞さんもおっしゃっていましたが、確かにうちの会社も含めまして先物買いで、学生さんとはこういう会社もあるよということを入学した時点でやっているところもございます。しかしながら、実際の話として３学年、４学年になられると、やはり悩んで

いらっしゃる学生の方もたくさんいらっしゃるので。特に高専の皆さま方は引く手あまただと思いますから、今一度地元の企業と接点を持たせていただきます。

そして、先ほどアントレプレナーの話が出ましたが、アントレプレナーのバックアップも商工会議所はやっております。もちろん、会社で重要な位置に就いて会社を発展させるという考えの方もいらっしゃるとは思いますが、ぜひとも起業したいという方もたくさんいらっしゃると思います。

実は、私は日本商工会議所国際経済委員会の副委員長をさせていただいております。海外への接点ということも非常に大事な点でございますので、鯖江商工会議所を通じて、日本商工会議所を通じて、世界に伸びることができるような人になれますよう、そのためにはぜひとも鯖江で就職してください。ぜひこういったＰＲをしていただければと考えております。よろしくお願いいたします。

（長谷川校長）　ご提案、本当にありがとうございます。今おっしゃったように、地元の企業にいながら海外に展開していく場面というのは、本当に今たくさんございます。加藤さんがおっしゃるとおりそういうところもございます。メガネももちろんそうでしょうし、あらゆるところでそういう接点があるし、活躍していく場面というのは多いと思います。そういうところを私たちはもう少し学生さんたちにお知らせしていく機会を設けていかなければというのは、これは反省点かなと思いますが。

一方、先ほどちょっとお話ししましたが、そういうところを紹介する場をどうやってつくっていけばいいのかというのを、せっかくこういう機会ですのでこれはぜひ一緒に検討させていただける、あるいは考えさせていただける場があると、また学生さんが地元に残って地域の発展につながっていくのかなと考えます。ありがとうございます。

（末議長）　続いていかがでしょうか。他の委員から。

（野嶋委員）　ご説明ありがとうございました。同窓会としてというよりも、ちょっと個人的に感じた点を幾つか質問も含めてあるんですが。

確かに今改組の話も出ましたし、幾つかポイントが私もあると思っています。優秀な学生を高専として育てて世の中に送り出していくということ。それからもう１つは、優秀な学生に入学してもらいたいという受験の中での話もありました。

そこで倍率が少しずつ下がってきてなかなか心配というか懸念もあるということで。非常に素晴らしいプログラムとか、高専は現在でも素晴らしいと私は思っているんですが、それを今の中学生の皆さんやその保護者の皆さんにやはり伝わっていないんじゃないかなと。私は以前にも申し上げたことがあるんですが、やはりそういうふうに今でも感じてなりません。

ですから、これからまた改組をしてさらに素晴らしくステップアップをしていこうということではありますが、やはりそこを中学生の方や保護者の方にどうやって伝えていくのか。高専は地元でもこんなに素晴らしいことが学べる、あるいはこんな素晴らしいプログラムがある学校ですよということを、中学生の方、１５歳の子にうまく伝えられるのかという

年齢的なこともあります。保護者の方も、いや、高専に行くよりやはりとりあえず高校に行って、それから大学に行って欲しいなと思っていらっしゃる方が多いんじゃないかなと思うんです。その辺をどう取り組んでいくかということが１つ大きいポイントだと私は感じました。

それから改組の話ですが。１学科にして５系統９コース、非常に素晴らしいと思うんですが。いきなり令和８年度からこれで取り組んでいこうということですが、この辺がどうなんですかね。紙の上では分かるんですが、現場の中で令和８年から入ってきた子はこれでいきますと。それまでにいる在学生の２年生、３年生、４年生の子らは、今までのコースの中でやっていくということになるのかなと思うんですが。そこの移行というか、そのあたりどうなるのかなということが気に掛かりました。

今日は水野先生も来ていらっしゃるので、ぜひどうやって中学生の方に高専のことを伝えていけるのか、その辺をちょっとお聞きできればと思っています。ありがとうございます。

福井高専同窓会（進和会）会長
野嶋　祐記　氏

（末議長）　高専側から何かございますか。

（藤田教務主事）　中学生やその保護者にどうやって魅力を伝えるか。古くて新しい問題だなということですね。やはりずいぶん前から高専の魅力を何回も何回も伝えているけど、中学校の先生はどんどん代替わりしていきますので、同じ説明を何回も何回もというのが現実です。

それなりの工夫はしているつもりですが。マンガをつくったり、パンフレットをつくったりとかをしています。私どもは私立の高校・大学ではないので、入試ならずっと入試のことだけを考えるという部署がないので、片手間でやっていますからなかなか難しいですよというのが現実です。何にも増して人口減少が、もう本当にどうしようということです。これはすぐに企業のほうにも当然その波が行きますので、野嶋さんにはちょっと失礼ですが、私は本当に私どもの努力のなさだけですかと返したいというところです。

もちろん、先ほども示しましたように、例えば光陽中学校にも少なくとも今年３回は行っています。年内にそれぐらいは行っている、福井県の場合は全部の中学校に行っていますので。なぜかというと、調べると福井県の場合はこの中学校からは来ていて、この中学校からは来ていないということはほとんどないです。小浜から南の中学校は舞鶴に行くのでほぼ来ていないみたいですが、小浜から北の中学校はほぼ来ています。もちろん年によってのでこぼこはありますよ。でも１０年分ぐらい調べると、ほぼ満遍なく来ています。五十何校あ

りますが、だから全部回らないといけないです。それを毎年毎年繰り返してやっていきますので、私にしてみればこれ以上何をしましょうかという話です。

それから、改組をした後にそれをどう移行していくかという話ですが。この改組を実際に計画をしてきたのは今の４０代、５０代の先生方、これから十何年間にわたってこの福井高専をしょって立つ人たちが中心となって考えていただくプログラムだということです。やはり大学の先生は高専のことなんか考えてくれないので、高専のことは高専の先生しか考えないんですよ。なので、まず私自身としては高専のことを自分たちで考えたというのはよかったことだなと思っています。

あのコースは大きく変わっているように見えるかもしれませんが、実は言うほどそんなには変わっていません。そういうことが一番大事だと思います。私はもっと変えられたんじゃないかと思っていますが。若い先生方がこういうふうに変えたいというので、それを尊重したというのが私の感想ですが。そういう意味では、現場としてはおそらくなんとかやり繰りができる範囲で収まっているのじゃないかと思っています。

ただ、１年生からスタートしたときに、それより上の学年の子たちがどうやってモチベーションを保つのかというのは課題なので、そこはちゃんと考えてあげないといけないなと思います。ただし基本的なところは共通なので、例えば情報系のものを入れますよとしていますが、情報の基本的なことは今すでにやっていますから、そういうことをちゃんと学生に理解してもらうところが大事かなと思います。

（野嶋委員）　ちょっとだけ言ってもいいですか。神山まるごと高専にも１人今年行かれたというお話もさっきちょっと出ましたが。神山まるごと高専は今４０人しか採っていませんが、すごい倍率になっています。やっぱり話題性もあって、非常に全国から注目されているのかなと思っています。ですから、福井高専も改組を機会にそういう話題をしっかり巻き起こしてほしいというか、そういうことも大切なのかなと。逆に言うと、メディアさんの力も借りながら福井高専の素晴らしさをアピールしていただいて、興味を持ってもらって、１回行きたいなという気持ちになってもらう。

それと、今は若い人たちはやはりＳＮＳ、ソーシャルメディアに触れる機会がとっても多いと思うので。YouTube などもされているというお話がありましたが、もっとそういう学校の現状とか、学生が今こんなことをやっているよとか、面白いことをそういうもので情報発信をしていただくと、ひょっとすると若い中学生の子とかも見ていただけるかもしれないし。そういうこともちょっと考えていただけたらと思います。以上です。

（藤田教務主事）　たぶん今のお話は全体の戦略というんでしょうか、どういうものを YouTube で発信して、どういうものを紙媒体で行って、あるいはどのタイミングで何を言っていくかというのをやはりちゃんと考えないといけないよという、そういうご意見かなと思います。それはちょっと腰を据えて考えたいなと思います。

（長谷川校長）　今の広報戦略ですが、これはとても重要なことだと思います。なにせ私どもが改組申請の手続きを開始したのは先週のことですので、今ほっとしたところでございま

す。これから改組の広報活動に関しては本格的にやらせていただきたい。従来型の中学校訪問ももちろん重要なことだと思いますが、野嶋さんがご指摘されているようにやはりYouTube であるとかＳＮＳ、こういったものも活用しながら、場合によっては外部の方からそういう強力なご支援をいただきながら広報活動をさせていただくのも必要なのかなとは考えております。ありがとうございました。

（末議長）　辻子先生。

（辻子総務・企画主事）　改組の件で少しだけ補足させていただきます。改組で３０名の専門探求コース、１０名の情報融合コースに分かれるという話をさせていただきましたが、基本的にプログラムとしましては従来型の専門探求コースの学生が手を挙げて情報融合コースへ行くとチャレンジングなプログラムです。そこで、場合によっては挫折というと変ですが、ちょっと困った、やはりちょっと違うなという場合は、元に戻ってこられるような設計になっているということが、中学校の先生に安心していただけるようになっています。それぐらい両方共存できるようなプログラムになっております。

先ほどちょっと藤田先生のほうから話がありましたが、大きく変わっているチャレンジングな部分もありますが、比較的オーソドックスで今までと同じような部分もありますので、その辺はご安心いただけるんじゃないかなと感じています。以上です。

（鎌土委員）　ちょっとよろしいですか。

（末議長）　鎌土先生。

（鎌土委員）　今回の資料を見て私が一番心配したのが、応募者数が１．１倍ということで、ちょうど私が高専を受けるころの倍率に近くなってきたのかなと。オイルショックのころに１回どんと落ちたんですね。それから復活していって、今回また少子化でこうなったということなんですが。

その中で、高校のほうは探究型学習とかという言葉で増えました。なんで高校が探究型になって、だったら高専はどう言えばいいんだろうという感じですが。全面的に、高校がする探究型学習よりも、高専でする探究型というのはものすごくいいものができるんだよということをどんどんＰＲすれば変わってくるんじゃないかなと。今日もいろいろな資料が出てきましたが、それぐらいで変われるようだったら簡単なことだなと思ったりしましたが。藤田さん、ぜひそういうふうに言ってください。

それと女子学生の募集、増やしたいという、獲得という話がありましたが。これは我々高専のほうから要望がありました。女子学生を増やすためにはどうしたらいいのか。女子学生のキャリアをよく考えてくださいと。それと、やはり地元に帰りたいという子が必ずいます。ではどういう方向が、キャリアが考えられるのか。教職です。

女子学生などが進学するときに、うちの大学なんかだとやはり工科系で、それも高専の学生は３年間あるものですから、教職を取るといってもかなり難しいです。理科は特にそうですね。先ほど言っていた高校や中学の先生に、高専とかうちのような大学をちゃんと理解してもらうためには、工学部出身の理科の先生がいないと絶対的に駄目です。アプリケーショ

ンとかいいところを分からないです。ですからそういった人材を育てるんだということで言えば、かなりいい方向に行けるんじゃないかなとは思うんですね。

それは高専さんだけではできないです。そのとき言われたのは、新潟ですとマスター前だとうちの大学と上越教育大学があるんです。そこで連携させてちゃんと取れるようにしてください。大学院まで行くことを前提にしてということなんですが。そうすると専修免許を取れますから、中学、高校の教頭に行くまでの資格は持つんですね。そういった方向をちゃんとやったらどうですかということになります。

今、うちも改組をして、高専から来た学生でも大学院を出るときにはきちんと専修免許が取れるプログラムをつくりました。かなり厳しいのは厳しいですが、それなりにモチベーションがあれば行けるようなかたちにはしました。ですからそういうキャリアパスみたいなものをちょっと考えてあげるのはいいことじゃないかなと思います。

ぜひ、福井大学さんもそういうふうにしていただければ。本当に工学部に行ってくれる学生が今少ないですね。工学部もそうなんですが。われわれの大学にとっては、高専さんがこけたらうちもこけますので、そうならないようにするためにもぜひ頑張っていただきたいと思いますが。いろいろな地方の大学と一緒になって修士まで行ってもらって、本当に工学の分かる教職、理科の先生を育てるということは、今後のことを考えるとすごく重要だろうと思います。日本の行く末を考えても重要な位置付けになるんじゃないかなと思います。

あともう１点、先ほど山本さんからいろいろお話がありましたが、文理融合ではなくて、もうボーダーレスにすればいいんですよね。私自身そう思っているんです。スタートアップとかアントレプレナーなんかをするときには、先ほどのデザインシンキングとか、あるいは社会科学をいかに取り込むかというのがすごく重要になってくるだろうと思うんです。そういったところは高専さんだけでするのはかなり難しいかもしれませんが、やはり大学とかいろいろなところと連携して。うちなんかもそこはやはり圧倒的に弱いんです。

スタートアップをしようと思ったら、技術だけじゃ絶対駄目なので、その辺がある程度理解できるようにはなっておいてほしいです。ただし、本当の専門家は雇わないと絶対にうまくいかないですから、その辺ちゃんと理解できるような人材を育てるということはすごく重要だろうとは思うんです。そういうところはいろいろなかたちで、有名な人、先生方もおられるでしょうからお呼びしてやればできるんじゃないかなと。

この改組については、本当にうまいことかたちをつくられたなと思います。定員はまったく変えないということですね。本当は文科省としては一時的には変えてほしいんですよね。そして終わったら元に戻すという方向で。もともと変えずにいくと。ただし、情報人材が１０人ずつ、２０人ぐらいは増えますよということで申請はしているということですよね。

（辻子総務・企画主事）　現状４０人が８０になります。

（鎌土委員）　そうですね、見た目は。うまいことされたなと思って。この定員はそのままですから元に戻す必要はないですよね。そのままでいけますよね。

それと、今一番足りないのは確かにデータサイエンスのところなんですね。それ以外のところでいろいろな分野ごとに情報を扱って勉強して、応用情報学みたいなことをやっている先生はたくさんいるんですね。うちなんかも募集したらそういう人がすごく集まります。そういう意味では教員の採用もしやすくなるんじゃないかなとは思いますが。その辺をうまくやられればいいかたちのものがつくれるんじゃないかなと。次のモデル高専にもなれるようなかたちをつくられたなと思っていますので、ぜひ頑張ってください。応援します。

（末議長）　何か高専さん側からございますか。

（藤田教務主事）　応援、ありがとうございます。１．１倍の件ですが。探求コースが非常に倍率が跳ね上がったのはその前の年、令和５年から以降ですね。その年に跳ね上がっていたので、この近くだと武生高校あるいは鯖江高校、それから福井市の羽水高校とかそのあたりが跳ね上がっていたので。実は、去年はその探求というのを割と意識していろいろな説明をしてきたというところです。ところが、去年はもう１つ高校無償化の話がぼんといきなり出てきましたので、また別のファクターがそこで加わってきたという事情が少しあるかなと思っています。

（鎌土委員）　福井県は高校が無償化になっているんですか。

（藤田教務主事）　はい、なりました。完全無償化です。

（鎌土委員）　厳しいな。

（加藤委員）　いや、大きい敵ですよね。

（藤田教務主事）　一応いろいろな人のご努力があって、昨年の１２月に高専もということで県議会を通ったので、今の福井高専の学生は１年から３年までは完全無償化になりました。

（鎌土委員）　そういうことか。支援があるんだ。

（藤田教務主事）　ですので、滋賀県とか石川県に行ってその説明をすると、非常に反応があるということです。

（鎌土委員）　今年は追い風ですね。

（藤田教務主事）　なので今年の９月２１日のオープンキャンパスは県外が非常に増えているんです。去年よりも２０人ぐらい増えています。

（鎌土委員）　県外から来た人も無償化ですか。

（藤田教務主事）　はい、県外から来た人も無償化です。

（鎌土委員）　本当？

（藤田教務主事）　福井県の私立高校にも県外の方がおられますから、その方も対象になります。なので福井高専の学生も対象になると。

（鎌土委員）　大阪は大阪府だけですもんね。

（藤田教務主事）　はい、大阪は大阪府だけです。

（鎌土委員）　大阪の人しか駄目なんですよね。

（藤田教務主事）　しかも住んでいないと駄目ですよね。

（鎌土委員）　ああ、そうなんですか。
（藤田教務主事）　福井県はその縛りがないんです。
（鎌土委員）　素晴らしいですね。
（藤田教務主事）　福井県は太っ腹といいますか。（笑）
　それと先ほどの教職の話なんですが、これはそういうふうにしていただけると非常に私どもはありがたいです。事実、２、３年前に専攻科の学生が福井大学の教育の大学院に進学したんですが、結局２年じゃなくて３年かかるということもありますので、ぜひそこは。その子は中学校時代からいろいろなことがどうもあったみたいで、非常に志が高く教職を目指している人だったので、ぜひそういう子を救ってあげてほしいと思います。そこは福井大学さんとぜひ連携を取っていきたいなと思っていますので、よろしくお願いいたします。以上です。
（末議長）　地元の国立大学としても。
（鎌土委員）　うちに来ていただいたら簡単に取っていますので。（笑）うちのせいで落ちたら。
（末議長）　その問題はうちでも大問題になりまして。結局、理屈の上では取れるんですが、やっぱり実際運用してみると絶対に取れないということが分かって。
（鎌土委員）　いや、そんなことないですよ。取れます、取れます。
（末議長）　うちの体制の中。
（鎌土委員）　体制の中では。
（末議長）　それをたぶん確か組み直したと思うんですが。今はだからそれは一応解消はされていると思うんですが。
（長谷川校長）　よろしいですか。
（末議長）　はい。
（長谷川校長）　今のご提言で、本校からそういう教員の道があるんだということなんですが。実際には水野先生、例えば工学部出身の中学校の教員の方というのはいかがですか。
（水野委員）　公立にはまず。
（長谷川校長）　なかなかいらっしゃらないですか。
（水野委員）　私たちの世代の仲間にはいないです。
（鎌土委員）　今までは、うちの大学でも工業は免許が簡単に取れるんです。ただ、理科じゃないとあまり意味ないですよね。
（藤田教務主事）　だからうちの卒業生でも。高校ですよね。
（鎌土委員）　うん。工業高校の先生なんかは。
（藤田教務主事）　高校で化学を教えてたりとか、そういう人は何人か知っています。工業高校も、もちろん何人かいるんですが。
（鎌土委員）　理科じゃないとやっぱり意味がない。
（藤田教務主事）　理科を取っている人も何人かいます。

（水野委員）　マイクを持ったのでよろしいですか。

（末議長）　どうぞ。

（水野委員）　高専さんのアピールの話が先ほどあったかと思うんですが、以前から高専さんは夜に福井ブロックを集めて説明をするというような県立、私立にはない努力はされてきていると思います。先ほどお話があったように、教員に対しての説明も本当に丁寧にしていただいていると思います。それがたぶんこどもに教員を通して伝わっていない。そこが問題なのかなと。われわれの問題もあると思います。

どのように考えるのかといいますと、中学校３年の段階で高専さん、１希望はここ、何科と。中学校の教員としては本当にこれをやりたいんだなと関心・意欲・態度を大事にして１希望、２希望を決めていくんですが、その指導の中でこどもは、中学校３年の段階で自分は何をやりたいのかをそこまで決められる生徒がまず少なくて、ましてや理系か文系かさえも決まっていないような生徒もいないことはない状況になります。

福井県中学校長会会長
（福井市光陽中学校長）
水野　克己　氏

今、男子も女子も含めて情報技術の学習意欲とかが９５％以上を超えていると。中学校の理科の授業の様子を見ていても、班でいろいろな実験をしたり、技術でいろいろなことを男女一緒にやっていますが、リーダー性のある女子がリードすることのほうが多いです。男子はくっついてなんか乗ってきたり、そういうのが多いです。中にはばーっと書く男子もいますが、そういう女子がいる、その女子を生かしていかないといけないんだろうなという気がしています。そのことからいくと、未来社会デザイン工学科という名称だけでも、女子生徒、男子生徒にとっても重荷がちょっと取れたのかなという気が個人的にはしています。

あと、私が考えるには中学校は探求型というか学習がなかなか難しい。そこをやろうとしているんです。日常生活で課題を見つけて、地域や仲間やいろいろな方、会社とかそういう方と協力したりしながら情報を得て、分析しながら課題解決策を練っていく。その後発信していく。そういう力を付けたい、やろうとするんですが、いまひとつ。外に出て調べたりするのはできるんですが。小学校はそれをやってきていて、本当に小学校から地域の方々に支えていただいている。

かといって、もう一歩踏み出そうとすると中学校の持っている知識や技術ではなかなか難しいことはできないということで、教員もそこのシーンをどうしたらいいのかなと悩んでいるんですが、高専さんはそれをできるのではないかと思います。専門性がありますし、

先ほど文理融合という言葉がありましたが、高専には素晴らしい設備があるし、知識を生かしていって、解決をどんどんしていく。

最近はプレゼンする力、プレゼンも大事だと言われているので、ゴールをまとめる。まとめ方をプレゼンの方向に持っていく。高校は「プレゼン甲子園」がありますが、そういうところにチャレンジしていくと持っていけば、強みの理系の部分と、ＰＲしていく、発信していく文系。分けるのもよくないかもしれませんが、そういう部分を目標を持ってやっていけるのかなという感じがしています。

あとはやっぱり国立ということで、生徒だけじゃなくて教員を引っ張っていく。今の教育にはわれわれがこれから身に付けていかなきゃいけないスキルなんかがまだ弱い部分がありますので、そこを先頭を切って教員のために何か集めて、教員もこういう体験ができますよとか、こういう指導の方法がありますよというのをやっていくのも１つかなと。

それに、幾つも幾つも行くのが大変でしたら例えば中学校長会の場を使って、理事会などでそこから広げていくとか、使ってもらえればいいのかなと。簡単になんでもハイハイとは言えないんですが、そういう方法もあるなという気がします。ぽつぽつとした言い方ですが、その辺を頑張っていただければいいのかなと。

確かに県立とか私立の学校では、運動をやりにとか、この部をやりにとか、学科をやりにとか、ちょっと幅広く捉えられるんですが、高専でこの部をやりにというのはまずないようなところはあります。理系と絞っていくのもそこが厳しい、緩やかな部分がちょっとないのを、そこをわれわれも含めて、向いているこどもはいっぱいいると思いますのでしていきたいなと思っています。

先ほど企業の話もありましたが、本当に少子化というのは中学校は非常に危機感を持っています。バスの運転手もいなくて、バスが走らなくて修学旅行も３日が無理じゃないかと、そういう状況になるだろうという感じです。

あと、本校だけ見るとやはり外国の生徒が増えてきている。そのうち働く人にどんどん外国の人が増えれば、中学生もどんどん外国の人が増えていく。われわれのこの語学力では太刀打ちできないんじゃないかなという危機感を持っていますので、こういう時代がやってくるんだろうなという、そのための大きなチャレンジかなと思って聞かせていただきました。すみません、とりとめのないことでした。

（末議長）　高専さんのほうからございますか。

（藤田教務主事）　今、うちの学校は１年生から２年生に進級するときに学科再選択制度というのをやっています。ただこれは条件があって、学力試験で合格したりとか、推薦の第２志望で合格した子に対して、あとは成績でちょっと縛りをしているんですが、１年生から２年生のときに学科再選択制度というので学科を変わると。今の１年、２年生は、変わったのは８人ぐらいですかね。これは学科改組をしても、今度は系の選択をするという、系を変えることができると。入試は学科を選ぶんじゃなくて系を選んでもらうというやり方でやりた

いと思っていますので、系を変えることができますよと。この仕組みは残していこうかなと思っているところです。

（加藤大紀委員）　企業側から１つ。まず、我々は本当に高専の生徒さんがウエルカムなのかというところで、生々しいんですがお話ししますと、毎年うちの会社に１０人プラスマイナスで入っていただいています。もちろん同じ人数、もしくはプラスアルファで大学から来ているんですが。大学のほうは、うちの会社は福井信越化学じゃないので、本社のほうが人事権を持って送り込んでくるというかたちなんです。ただ一方で、高専の方は非常に身近な存在で働いてくださると。

言葉は悪いんですが、会社なんて学生が入ってきたらどう使うかをまず考えるんですが。そんな中で、うちの会社で次なる飯の種を開発しているのは、残念ながら高専の生徒さんじゃないんです。これまでの歴史を見ても、世界中で使われるような新素材を開発しているのは、やはり大学を卒業された方がメインのチームでやっていると。

信越化学工業（株）武生工場長
加藤　大紀　氏

ただ一方で、企業なんて研究開発チーム以外に数多くの部門、もちろん経理があれば、人事、生産管理、環境保安部、現場、生産技術といろいろな部門があるんですが。それぞれの部門でそれなりに核になる人材をどうしても置きたい、必要というときに、高専を卒業された方はしっかり考える力を持った上で、例えば専門じゃない生産管理をやってねと言っても、はいと言って素直にやっていただいて、そこで活躍されています。うちの会社だけで言っても、ＯＢの方々はうちの海外工場の社長をやっている人とか、そういうメンツがたくさんいらっしゃるんです。女性も含めて、女性は女性で分析系のところにも活躍をいっぱいしていますし、ずっと１０年、２０年、３０年、４０年と働いている方はいっぱいいらっしゃるので、ぜひその方々の活躍ぶりとかその辺もどんどんＰＲしていただけたらなと。

本当にリップサービスじゃなくて、そういった意味で企業としても毎年来ていただいています。ただ、言い方が悪いですが、いろいろなことをやっていただかないと駄目なので、専門だけでいけるかというとそれはギャランティーできないんですが。そういう面では、先ほどから議論になっている文理融合とかいうのは全然関係なしです。高専の生徒さんは、少なくともしっかり考える力を持たれて、そこの場でしっかりまたコミュニケーションを取りながら、最終的には国際人として海外に行っている人もたくさんいますから、そういった先輩も含めていろいろＰＲをしていただければいいんじゃないかなと思いました。

（藤田教務主事）　５月にオープンキャンパスをやったときには、卒業した地元の企業に勤めている女性に来ていただいて、保護者や中学生にいろいろな話をしてもらったりしていて、そこで少しＰＲはできたかなと思います。

（山本委員）　お叱りを承知で聞くんですが、これは国に聞かなきゃいけないことですが。高専という名前で会話が進んでいるじゃないですか。正式にはこちらの場合も福井工業高等専門学校と。これは、この名称は残さなきゃいけないんですよね。

（長谷川校長）　それは「学校教育法」の名称なんですが。

（株）福井新聞社常務取締役
山本　道隆　氏

（山本委員）　例えばそれは残すんですが、われわれがよくコピーライターと話すときにサブタイトルはどうするかということで、やっぱり高専といったら頭の概念の中で高専だと絶対思うと思うんです。言えば工業高等専門学校だと。どうしても「工業」と付くと、先ほど改組の中で出たような未来社会デザイン工学科という、そこに持ってくるにはなかなか入り口のところで難しいのかなと。これは高専機構とか国の法で決まっているということなんですが、そこの部分は守らなければいけないんですが。例えば、それこそ福井高専という名前を残しながら学科改組したものが、この上にサブタイトルでとか、そういうことも駄目なんでしょうね。

（鎌土委員）　できないことはないと思いますよ。例えば仙台高専でしたか、宮城高専と仙台電波工業高等専門学校が合併して仙台高等専門学校になっています。ですからカテゴリーとしてはこういう制度の中に入っていますよと。ただし名称そのものは変えていいと思いますが。

（山本委員）　ふとそういうことを思ったんです。

（鎌土委員）　富山もそうですよね。今は富山高等専門学校となっていますが、もともとは富山工業高等専門学校と富山商船高等専門学校が合併して富山高専になっています。ただし、本郷キャンパス、射水キャンパスというようなキャンパスで分かれていますから。そういう高専が幾つか出来上がっていますから、名称そのものはある程度の合理性があれば。ただ、それを決めるのはたぶん高専機構が握っているんです。

（山本委員）　そうですよね。

（鎌土委員）　こちらのほうの意向は意向として受けてもらえるとは思いますが。

（山本委員）　いろいろ会話をお聞きしながらそんなことをふと。どうしても既成概念の枠を変えようとすると、変えることが全てではないんですが、やっぱり変わらなきゃいけない

ということになると、自らが変わるという力も出さないと変わっていかないかなと思ったので。

私どもが１００周年を迎えるときに社内で２年かけて委員会をやったと。そのときに、若い社員から大胆に福井新聞という名前を取ったら駄目なんですかと。それは最終的にやはりうちは福井ですから付けないと駄目なので。ただ、その発想が駄目だと。外の情報をもらって外へ発信するときに、福井という冠を取れないのは成長できないと。結果的には福井新聞社は残したんですが、そういう論議をちょっとふと思い出して話をさせていただきました。

（長谷川校長）　まさにそういうのは内部の発想では生まれないので貴重なご意見として伺って、愛称とかそういうかたちであればまた考えようがあるのかもしれませんが。すみません、ちょっとそれはすぐには答えが出せないかと思います。ありがとうございます。

（末議長）　それでは、話は尽きないところではあるんですが。

（川邊委員）　すみません、ちょっとだけいいですか。

（末議長）　全体討論終了のお時間が近づいていることから、短めでお願いします。

（川邊委員）　人材というか卒業生のお話で、就職の話なんですが。実は福井県は中小企業がすごく多くて、３０人から１００人ぐらいの企業さんが一番多いんですが、たぶんそういうところの雇用は開発事業がすごく欲しいなと言われていて、実は本当言ったら高専さんとか福井大学さんの卒業生が非常に欲しいと。卒業生の方が、そういう小さい企業を知る機会がなかなか少ないのかなと思っています。

われわれ工業技術センターの中で、実は福井大学さんだけですが学生の卒論生とか修論生と一緒にうちの中で仕事というか研究をしていただく機会が結構ありまして、その機会にやってくる中小企業さんの開発の人と仲良くなったりするんです。すると学生さんはその会社に就職したいかなとちょっと思ってくれる機会が最近多々あってですね。そういう中で、高専の学生さんともそういう機会がたくさんできるといいんじゃないかなと思っております。

福井県工業技術センター所長
川邊　和正　氏

もし、できれば高専さんと一緒に産学官連携の共同研究をするとか、もしくは我々工技センターと高専さんの先生方で共同研究をするとか、そういう中で学生さんがうちの職場に来る。うちの職場は中小企業さんがたくさん出入りしているので、そういう方との触れ合いを多くするとか、そういう機会がたくさん生まれて、県内の企業さんはこういう面白い開発をやっているのか、こういう事業をしているんだなというのを

学生が身をもって知ると、県内に残ってくれる機会の１つにならないのかなと、話を聞いていて思ったりもしていたので。ぜひ、これから高専さんとの共同研究なりをやらせていただいたら幸いかなと思っております。またご検討いただけたらと思います。

（長谷川校長）　ありがとうございます。

松井先生、何かコメントはありませんか。

（末議長）　では、なるべく短くお願いします。

（松井研究産学連携主事）　ご提案いただきましてありがとうございます。本校としましても、ぜひこういう技術センターを含め中小企業の方々と学生の卒論ですね、そういうものも含めて協働させていただければと思っていますので、またどうぞよろしくお願いいたします。

（末議長）　どうもありがとうございます。それでは、これからいったん休憩ということですが、鎌土学長のほうがご都合により退席ということですが、何か最後に一言。

（鎌土委員）　ぜひ頑張ってください。全面的に応援します。

すみません、私は明日からメキシコのほうに飛ばないといけなくて、今日中に向こうへ帰らないといけないものですから、ここで失礼させていただきます。

（末議長）　お忘れ物のないように。じゃあ、どうもご苦労さまでした。ありがとうございます。

それではここで休憩に入ります。

～～　＜休憩＞　～～

（末議長）　大変お待たせいたしました。これから講評のほうに入りたいと思います。最後に私の全体的な講評をさせていただきますが、まず各委員から１分から２分ぐらい、ごく簡単で結構ですのでご意見等をお願いしたいと思います。じゃあ、加藤さん。

（加藤団委員）　私から。

（末議長）　簡単で結構です。

（加藤団委員）　まず産業界の代表として言えば、福井高専さんは最先端の専門技術を身に付けられる。そこに尽きるのではないかと思います。そしてそれがかっこいいと思っていただけるような人を増やして、入り口、いわゆる入学の人口を増やしていただく。そして産業界とすれば、卒業生が二百数十名とお聞きしていますので、支えるとは言いませんが、地場産業の中核を成すというようなことを言っていただく必要性があるのではないかと。それを言っていただくことで定着率もそうですが、ちょっと地場産業のほうにも目を向けていただけるのではないかなと考えます。以上です。

（末議長）　では次に加藤委員、お願いします。

（加藤大委員）　今回、改組の一環で、学科の専門に情報の部分をプラスしたチームをつくっていただけるとご説明いただきましたが、ＤＸにも絡むんですが、企業は本当にこれから省人化と、あとは国際化に対して対応していくのにＤＸは欠かせません。それは現場だけじゃなくていろいろな部門、全部門、どこの部門に行ってもそれはもう逃げられないので、そ

ういった生徒さんは特にウエルカムですので、ぜひ専門知識プラスそういう知識も持っている生徒さんができるとありがたいかなと思います。よろしくお願いします。

（末議長）　山本委員、お願いいたします。

（山本委員）　いろいろなことをお話しさせていただきましたが、６０年を迎えるということなので、６０年前の高専という概念の原点というのがあったかと思うんです。ただ、それはそれとして大事なことだと思うんですが、せっかくこの改組という大きな節目を迎えられるときに、振り返りながら、できれば違った福井高専の姿が見られたらいいなと思っています。今日われわれの時間を使っていただいたんですが、われわれをお呼びいただいたことが、そこのところに多少なりとも成果につながるような会話であったらよかったなと思っています。ありがとうございます。

（末議長）　では次に野嶋委員、お願いいたします。

（野嶋委員）　改組も控えているということを初めて聞いて、高専の中での差別化とか、全国の高専とはまた違うぞと、きらりと光るというようなイメージとか、あるいはまた個性を大切にしながらやっていってもらえるというようなことで、そういうところをまたやってもらいたいですし。入学に向けてもさっきちょっとお話ししましたが、いい学生をしっかり確保できるようにまたＰＲも含めていろいろ工夫をしていただければありがたいなと思っています。

（末議長）　それでは川邊委員、お願いいたします。

（川邊委員）　改組を含めて、改組をすることによって創造力豊かな専門性の高い人材を育てたいという意志を持っているということで、本当にいいお話が聞けたなと思っております。

その学生さんがぜひ県内に就職をして、県内の産業を活性化する人材になってほしいなと思っています。そのために、先ほども触れさせてもらいましたが、県内企業とつながるようにわれわれと一緒にまたいろいろと共同研究なり連携をさせていただいたら幸いかなと思っておりますので、また今後ともよろしくお願いいたします。

（末議長）　次に水野委員、お願いいたします。

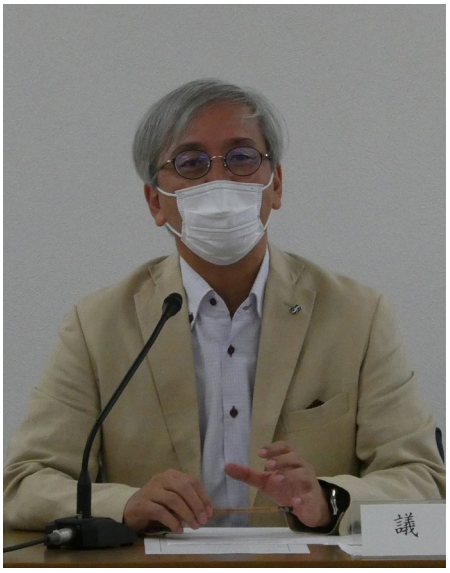
（水野委員）　今は中学校もそうですが、どういう生徒を育てていくのかということが一番大事になってくるのかなと思います。中学校も高専さんも魅力を発揮して、個性を発揮して、今お話があったきらりと光った生徒を育てていけるように私たちも協力していきたいですし、また私たちにも協力していただきたいと思っています。本日はありがとうございました。

（末委員）　どうもありがとうございました。それでは私のほうから最後に、簡単にまとめさせていただきます。総合講評ということでお願いいたします。

まず一番の印象は、各委員共にそうだったんですが、やはり改組というところで、学科名を見ても非常にインパクトの大きい、逆の言い方をすると何かよく分からないぞというようなところもあって。確か藤田先生の説明にも「変わったようで変わっていません」とありましたが、今年同じように改組を計画しているうちの工学部長に、私のほうからも変わった

ようで何も変わっていないじゃないかと同じことを言ったんですが、そのとおりでございますみたいな話で、改組の心というのは割とそういうところにあるとは思います。

完全に変えてしまうのではなくて、やはり変えるべきところ、世の中の動きに連れて変わっていく必要はあるが、じゃあ、それを本当に何から何まで変えていけば全てフィットしていくのかというとそうではないですし。ましてや専門教育の流れというものはそう簡単に変わるものではございませんので。やはりそこの本流というか根っこのところが何も変わっていないのは当然のことだと思います。それを言葉で表せばそういう表現になったのかなと思うんですが。



福井大学副学長
末　信一朗　氏

その改組に関してはやはり一番大事なのは、その改組によって入り口出口がどう変わってくるか。これはプラスのほうに向かわないと大変なことになるわけですが。特に入り口に関してはこれから少子化というところで、先ほどの高専さん側からの資料説明を見ていましたが、やはり志願倍率が１．０というのはいかにもきついなと。私どももそんなことを言っている余裕はないんですが、やはり実質的には大学入試の場合は２倍から３倍ぐらいはないとなかなかよい学生の確保は難しいと言われています。高専受験はまた少し状況は違うとは思いますが、１．０というのは非常に厳しい数字だなと思いました。

そういう意味で入り口といったようなところで、やはり女子生徒をいかに確保していくかというところで、地元の中学の理解を進めるといったことや、それから親を巻き込んでいく必要があるんじゃないかなと。これは確かにいろいろ言われていまして、女子生徒の場合には、例えばオープンキャンパスみたいな行事には親も一緒に実験室に入れて一緒に見せるというようなことをやらないと駄目だと。これは中学生の親にはものすごく効果があるという話ですので、そういう入り口の確保といったところには全力を注いでいただきたいと思います。

それから、どんな人材を輩出していくかという出口の問題ですが、やはり高専ならではというか、高専としての使命というのは専門性を付けた即戦力、実践力を持った人材が期待されるんだろうと思います。そういった人材をいかに輩出していくかというところで、これもかなり議論がありましたが文理融合や、コース間を渡ることができる転コースといったような考え方もあるということですので、専門性を育てながらもそういう柔軟性といったものも育ててほしいということになるかと思います。

さらに輩出した人材の地域定着。これはやはり少子化の世の中で、福井県がどうなっていくかといったようなローカルでありながら非常に重要な問題ですが。高専さんとしてもそ

ういった地域にも目を向けていただいて、卒業する学生さんの地域定着、それから地域への定着率の向上といったところ。定着率のことはお話が出なかったので、そこを測定されているのかどうかちょっと思ったんですが、定着率も含めて何かデータ取りをしながら方向性を示していただけるといいかなと思いました。

それから入り口確保、出口も含めてまったく一緒なんですが、やはりこういった高等教育機関というのは情報発信が非常に重要になってきます。それから入試の担当も常にいるわけでないというご説明もございましたが、そういった入試関係、入試広報ですね、そういったところに人員を割くのは非常に難しいかとは思いますが、こういった限られたリソースの中でどのように配置をしていくかもいろいろと検討していかざるを得ないのではないかなと思います。

それから最後に少し難儀な提言になるんですが、高専の名称の問題ですね。サブタイトルは自由に付けられるということですので、本当に付けられるのか、制度上の問題があるのかないのかも含めて、ぜひ何か福井高専の目指すものが分かるようなサブタイトルを考えていただければという委員の先生方からの圧倒的なご意見があったことをお伝えいたします。

もちろんできること、できないことがございますので、そこは取捨選択していろいろとご検討いただければということで、無理なお願いになって恐縮ですが、高専の発展を願う者としてわれわれは皆気持ちは一緒だと思いますので、ぜひそういった意味でお受け取りいただければと思います。私からは以上です。今日はどうもありがとうございました。

特に高専さん側からはよろしいですか。

（長谷川校長）　いいです。

（末議長）　それでは、以上をもちまして令和６年度外部有識者会議を閉会したいと思います。この後は高専さんのほうに進行をお願いしたいと思います。どうもありがとうございます。

（大野総務課長）　委員の皆さま、大変ありがとうございました。最後に長谷川校長より御礼のごあいさつを申し上げます。

（長谷川校長）　本日は長時間にわたりまして本当に熱心にご議論いただきまして、誠にありがとうございました。ただいまいただきましたご提言ですが、例えば改組に関してはおおむね好意的にお受け取りいただいたと考えています。私どものこの改組ですが、地域の皆さまと一緒にこの地域を盛り立てていく、そういう人材を育成することに注力していくべきかなと、本日あらためて思わせていただきました。

やはりこういった高度人材育成を、今たぶん全国で２１高専ぐらいが出そろってくるのかなと思われるんですが、どこも同じではなくてそれぞれの特徴がございます。そういった中で、私どもはやはり地元の方々と一緒にいろいろな共同研究をはじめ、人材を供給するであるとかそういったところを、本日の外部有識者会議を通じてあらためて感じました。

来年ちょうど６０周年を迎えますので、そういった記念事業の１つ、一環として例えばそういった愛称的なものを考えるなど、そういったものはまた検討させていただくことはで

きるのかなと思いました。いろいろ法的な問題もございますので、これは確約できませんが、ぜひそういった外部の新しいご意見をいただきながら私たちは福井高専をますます盛り立てていきたいと考えていますので、本日の貴重なご提言、ご意見を参考にさせていただきたいと思います。本日は誠にありがとうございました。

（大野総務課長）　これにて令和６年度福井工業高等専門学校外部有識者会議を閉会いたします。なお、本日お配りしました福井高専第５期中期計画概要説明資料につきましては、各委員の皆さまに後ほどデータにてお送りさせていただきます。本日はご多忙のところご出席いただきまして誠にありがとうございました。

（終了）

Ⅵ. 参　考　資　料

外部有識者会議

福井高専の現状と課題

本校の概要（総務・企画主事）
本校の教育（教務主事）
総括（校長）
将来構想と改組

令和6年9月5日（木）
於：福井工業高等専門学校　大会議室

Since 1965 Creativity and Curiosity 福井高専

前回（令和４年度外部有識者会議）の意見・提言

1．女子学生の獲得（増募）
※ホームページ、パンフレット、報道機関への広報に関し更なる努力を。
（教務主事より回答）ホームページ、パンフレット、オープンキャンパス（OG来校）での対応等。
2．外部資金の獲得
※民間との共同研究や公共団体の補助金を獲得してはどうか。
（総務・企画主事より回答）校内科研費支援策。福井県未来協働PFふくい推進事業、文部科学省事業等事業への申請。福井高専基金等。
3．地域連携の強化
※地域から高専は敷居が高いと思われる。
（総務・企画主事より回答）ジュニアドクター育成塾、起業家工房完成披露式での県教育委員会、近隣市教育委員会との連携。出前授業・公開講座等の対応。
4．全学生が携わることができる教育プログラムの導入
※リテラシーレベルからミドルレベル、上位レベルまで触れられるプログラムを。
（教務主事より回答）「学際プログラム（エンジニアリング・データサイエンスプログラム）」を令和6年度入学生より実施。
（校長より回答）「ガリレオの卵コンテスト（導入、課外）」⇒「ガリレオコンテスト（中級、課外）」 ⇒ 「プロジェクト演習（中級、正課）」 ⇒ 「創造デザイン演習（中級、正課）」 ⇒ 「ビジネスアイデアコンテスト（総括、課外）」へ。

外部有識者会議

福井高専の現状と課題

本校の概要（総務・企画主事）
本校の教育（教務主事）
総括（校長）
将来構想と改組

令和6年9月5日（木）
於：福井工業高等専門学校　大会議室

Since 1965 Creativity and Curiosity 福井高専

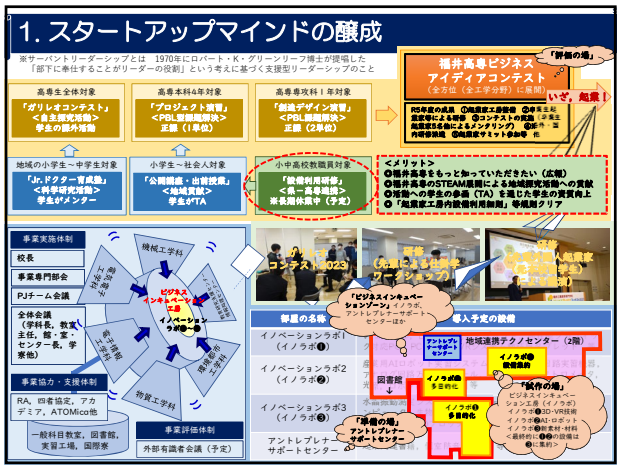
0. 福井高専を取り巻く状況

学校要覧を毎年発行　⇩学校要覧2024、P.56

		男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
卒業者数	Number of Graduates	34	1	30	2	37		24	12	29	12	27	8	181	35
就職者数	Number of Employed	20		25	2	22		11	6	9	10	15	7	102	25
その他	Others											1		1	
進学者数	Number of Entrants into Universities	14	1	5		15		13	6	20	2	11	1	78	10
求人会社数	Job Offered Companies	1480		1509		1396		1050		1177		2451		9063	
求人数	Job Offers	1480		1509		1396		1050		1177		2451		9063	

●入口は少子化の影響大：出口は好調（求人倍率：60倍(本科)～100倍(専攻科)）
●外部資金の獲得と地域連携
1. スタートアップマインドの醸成
　※学生：サーバントリーダーシップを持った複合融合型のエンジニア育成
　※教員：TechStartupHokurikuと連携（R6は1件採択）
　※「相互に教え・学ぶプロセスで育成するアントレプレナーシップ」へ展開予定
2. 外部資金の獲得
3. 本校独自の研究支援体制の整備
4. 地域でのSTEAM教育の実践
　※R6公開講座（16件）、R6出前授業（16件）、Jr.D育成塾（R3～R7年度）
　※リカレント（社会基盤メンテナンス）・リスキリング講座（探究学習支援）
●国際寮の竣工（R5年度）…完全個室化、ブロック化、カードキーシステム
　※R6年度は東寮の改修（中）
●老朽化した施設（福利厚生施設ほか）、ライフライン等の改修申請

1. スタートアップマインドの醸成



2. 外部資金の獲得

・研究費の獲得　※後述

・KRA、本校RAとの連携… 共同研究（R3:11件、R4:10件、R5:10件）
・本校独自の支援制度（校長裁量経費による若手教員対象インセンティブ）

・事業資金の獲得

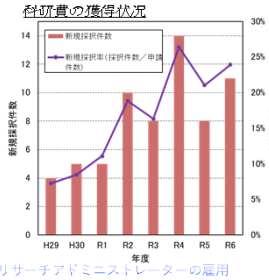
・福井県令和6年度「未来協働プラットフォームふくい推進事業」
　魅力アップ支援：5テーマ、PBL支援：２テーマ。
・文部科学省令和4年度補正予算「スタートアップ教育環境整備事業」
　起業家工房構築、地域STEAM教育との連携を視野。
・科学技術振興機構（JST）「ジュニアドクター育成塾」R3年度より5年間
　毎年約40名の入塾許可。R4年度Jr.D、R5年度Jr.D 全国大会で入賞。
　R6から福井大学STELLA（小中学生対象）との連携。
・財団等「中谷医工計測技術振興財団」「三菱みらい育成財団」ほか。

・寄附金の獲得

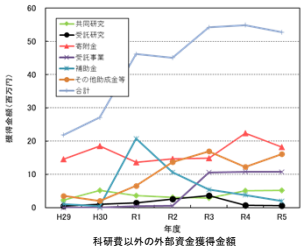
・福井高専「地域連携アカデミア」との連携
・福井高専基金の整備と展開（R7年は福井高専創立60周年）

3. 本校独自の研究支援体制の整備

科研費の獲得状況



科研費以外の外部資金の獲得状況



科研費以外の外部資金獲得金額

リサーチアドミニストレーターの雇用
◎研究推進、産学連携、知的財産に関する専門家を寄付金、**大学発新産業創出基金事業**にて雇用し、教職員からの相談、申請書類作成等に対応）
科研費申請への支援活動
◎講習会３回、１回はワークショップとして開催　◎学内RA、教員、機構本部による査読＊
査読論文投稿、学会発表への支援活動
◎査読付き論文の掲載に係る費用、参加登録費、旅費の一部を補助＊
（＊校長裁量経費による若手教員対象インセンティブ）

4. 地域でのSTEAM教育の実践

• 福井高専ジュニアドクター育成塾（JST事業）

・テーマ：クラフテックラボ（Craft × Technology）「伝統工芸 × IoT」
・第1段階40名に「Jr.マスター」、第2段階10名に「Jr.ドクター」称号授与。
・Jr.ドクター修了者は，推薦選抜出願の際に申請できる。
・令和4年度に福井高専入学：1期生Jr.M0名（不合格：2名）
・令和5年度に福井高専入学：1期生Jr.M3名＋2期生Jr.M4名＝計7名合格
（不合格：1期生Jr.D1名、Jr.M1名、2期生Jr.M1名＝計3名）
※Jr.D育成塾に入塾できなかった2名が受験、2名合格（外数）
・令和6年度に福井高専入学：1期生Jr.D1名合格（入学辞退）、1期生Jr.M1名合格、
※1期生別途神山まるごと高専1名合格、2期生Jr.D1名合格、Jr.M3名合格、
3期生Jr.M2名合格＝計8名合格
（不合格：1期生Jr.M1名、2期生Jr.M2名、3期生Jr.M0名＝計3名）

（左から）○地場産業ワークショップツアー（8月），○デジタルモノづくりの基礎講座（9月）
○レーザーカッターで模型飛行機を作ろう！（10月），○伝統工芸士座談会（2月）

外部有識者会議

福井高専の現状と課題

本校の概要（総務・企画主事）
本校の教育（教務主事）
総括（校長）
将来構想と改組

令和6年９月５日（木）
於：福井工業高等専門学校　大会議室

福井高専

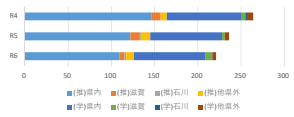
5. 入試倍率の推移と増募対策

各学科の推薦・学力出願倍率（上段推薦、下段学力）

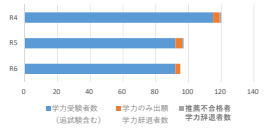
	機械	電気電子	電子情報	物質	環境都市	全体
R6	0.61	1.04	0.96	0.89	1.00	1.11
	1.42	1.67	2.25	1.00	1.58	
R5	0.86	0.79	1.00	1.11	1.43	1.18
	1.83	0.83	2.17	1.33	1.42	
R4	0.68	1.14	1.71	0.93	1.39	1.32
	2.25	1.00	2.67	0.83	1.58	
R3	0.67	0.80	2.07	2.00	1.73	1.33
	0.96	1.00	1.36	1.60	1.36	
R2	1.40	1.33	1.60	1.27	2.27	1.36
	1.52	0.80	2.20	0.56	1.08	

推薦70%に変更

推薦と学力の出願者数合計



学力選抜出願者数に対する受験辞退者数



合格者の評定点の平均
R3：104点、R4：106点、R5:104点、R6:102点

○R5年度→R6年度：受験生15名減少（内13名が福井県）
○県内県立高校探究学科の入試倍率高い、私立高校入学志向増加傾向　⇒入試説明会等のPPにおいて、本校探究型学習の説明を整理整頓・追加
福井県内高校授業料完全無償化
○複数校志願受験制度の検討開始

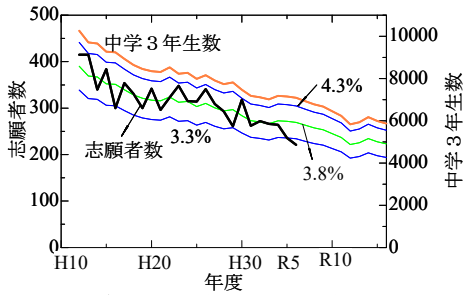
○各学科紹介ビデオを制作しYouTubeで配信
○女子学生増募対策⇒女子中学生向けパンフレット制作
○中学校訪問数：福井県（延べ132校）、
滋賀県（36校）、石川県（18校）
○入試説明会：13回（R5年度）
○高校説明会：7校（R5年度）

6. 過去5年間の志願者状況

年度	学科（募集人員）	機械（40）		電気電子（40）		電子情報（40）		物質（40）		環境都市（40）		計（200）		
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計
R6	志願者数	30	4	43	6	47	7	22	15	35	12	177	44	221
	合格者数	37	4	36	5	34	7	25	16	30	11	162	43	205
	倍率	0.85		1.23		1.35		0.93		1.18		1.11		
R5	志願者数	40	6	29	3	50	4	26	21	38	19	183	53	236
	合格者数	36	5	38	3	38	4	21	20	25	16	158	48	206
	倍率	1.15		0.80		1.35		1.18		1.43		1.18		
R4	志願者数	42	4	39	5	76	4	17	19	39	19	213	51	264
	合格者数	37	4	36	5	39	2	22	19	27	14	161	44	205
	倍率	1.15		1.10		2.00		0.90		1.45		1.32		
R3	志願者数	33	1	29	8	55	10	46	24	41	19	204	62	266
	合格者数	36	5	32	9	34	7	27	14	28	14	157	49	206
	倍率	0.85		0.93		1.63		1.75		1.50		1.33		
R2	志願者数	56	3	35	5	65	14	16	17	48	13	220	52	272
	合格者数	38	2	36	5	32	9	23	17	30	10	159	43	202
	倍率	1.48		1.00		1.98		0.83		1.53		1.36		

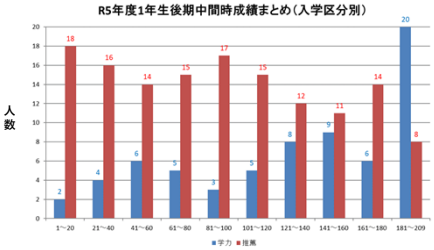
・R6県内志望者が前年度よりも１３名減少→私立および県立探究科
・追試験を含めて３名の受験辞退者、２名の入学辞退者　R6入学者　２０３名
・女子受験者の割合増加傾向
・学科間の志願者数ばらつきの解消が課題

7. 福井県内の15歳人口



福井県15歳人口（R3：7110名、R8：6929名、R13：5831名）
おおむね15歳人口の3.8%±0.5%が本校受験
R13　5831×0.038=221名に減少の可能性
増募対策の強化が急務（複数校受験を検討したい）

8. 入学後の１年生成績について



全1年生の席次

R4入試より推薦選抜定員増　15名→28名/学科　70%推薦選抜

R5年度 後期中間試験では成績上位者は推薦入試が多数を占める

9. 増募活動

・中学校訪問
福井県・滋賀県・石川県の中学校延べ１８６校を訪問（R5年度）

・学校紹介
学校紹介、各学科の紹介動画をHP配信
カレッジガイドを刷新　※訪問時3年生のクラス数分配布
リーフレット配布　※訪問時1年生の人数分配布
福井高専漫画配布　※訪問時2年生のクラス数分配布

・オープンキャンパス
９月に２日間開催（R５年度）
学生のプレゼンテーションにより本校の特長と良さをPR
参加者数：中学生３６９名（男子：２８９名、女子：８０名）
（県内：３２１名、県外：４８名）

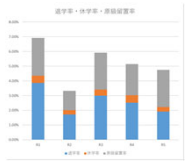
・入試説明会
福井県、滋賀県、石川県
参加者数：中学生２１７名（男子：１７２名、女子：４５名）（県内：１９１名、県外：２６名）
保護者２５１名、教員４９名（塾講師数４名を含む）

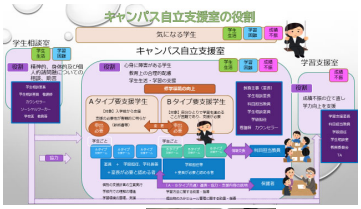
・高校説明会
７校で中学生に本校に魅力を説明

・複数校志願受験制度の検討開始

学校紹介の冊子作製（登場人物に女子生徒）
※訪問時2年生のクラス数分配布

10. 学生支援の状況





不進級率低下に向けた取り組み

○学習支援室（R5実績いずれも延べ人数）
1、2年生対象　数学、物理、化学の補習、学習会
教科担当、副担任、TAで組織的に運用　→　不進級率低下傾向
補習：学生635名、TA31名、教員42名
学習会：学生137名、TA7名、教員21名
○１年生寮生を中心とした「学寮学習指導会」
R4年度：定期試験前、１年生全員出席　延べ　11日間、511名出席
○R4より推薦70%　１年生成績　推薦選抜＞＞学力選抜

学習支援室の様子

R5年度：ＳＳＷ配置、カウンセラー増員

キャンパス自立支援室
合理的配慮学生（対象学生5名の支援チーム）
ひとりで学習困難な学生への支援（対象学生2名）

FDの充実
学習指導に関するFDワークショップの開催
新任教員研修会開催
新担任研修会開催＆メンター制度
3主事と担任の先生との懇談会開催

11. 国際化の状況・計画

R5 シンガポール研修にてナンヤンポリテクニックの学生と交流

留学生の受入れ状況
・本科留学生9名(3年生4名、4年生3名、5年生2名)

学生の海外派遣状況
・トビタテ！JAPAN　高校生コース→本科学生１名が
９月から１か月間シンガポールで研修
・海外インターンシップ→専攻科１名参加
マレーシア１名（８月より１か月間）

海外研修報告会(シンガポール研修, 中国学術交流)

今年度計画
・４月に海外研修報告会(R5年度分)を実施
・20名程度シンガポールポリテクニックにて語学研修プログラムを企画実施予定
・タイ国PSU(プリンスオブソンクラ大学）とMOU締結予定
・トビタテ留学生、海外インターンシップ学生の学内発表会を開催予定
・学寮内の交流（留学生と日本人学生）を企画実施予定

学生の英語力に関する分析・評価
・５月に本科４年生を対象にTOEICIP試験を実施　R5 310点→R6　336点
・今年度より１、２年生オンライン英会話を導入
・英語による専門教育
低学年：複数系の基礎的知識・概念を英語で学ぶ、テクニカルライティング・口頭発表の基礎
高学年：英語による専門科目の授業、英文アブストラクトの作成

教職員のTOEIC受験
・TOEIC　IP試験団体受験（受験料校費負担）の推奨

外部有識者会議

福井高専の現状と課題

本校の概要（総務・企画主事）
本校の教育（教務主事）
総括（校長）
将来構想と改組

令和6年９月５日（木）
於：福井工業高等専門学校　大会議室

Since 1965 Fukui College Creativity and Curiosity
福井高専

12. STEAM教育からアントレプレナーシップ教育へ

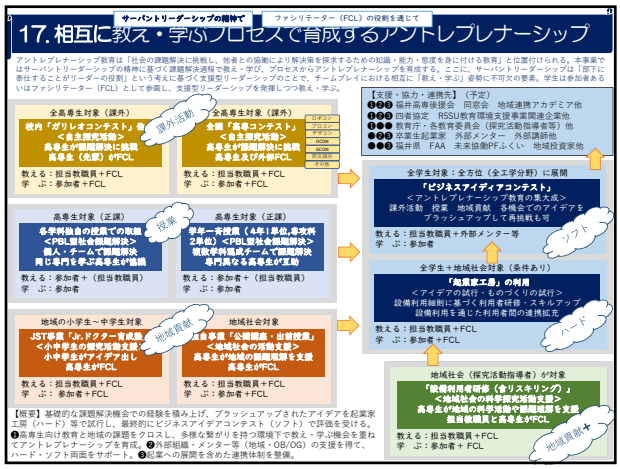
課題発見と解決　　地域課題の発見からビジネスへ発展

入学前 → 1年生対象 → 全学生対象 → 4年生 → 5年生 → 専攻科

- **Jr.ドクター育成事業（JST）**　出前授業　公開講座
- **ガリレオの卵コンテスト**　自ら科学的な課題を発見し、その課題を自ら解決し、活動成果をポスター発表　資金援助、単位化
- **ガリレオコンテスト**　自由な発想と豊かな創造力で、面白くて夢のあるプロジェクトを企画　資金援助、単位化
- **プロジェクト演習（４年）**　PBL課題解決型授業
- **卒業研究**
- **特別研究**　創造デザイン演習（専攻科１年）　PBL課題解決型授業

福井高専ビジネスアイディアコンテスト
学生自らが地域の課題を見出し、学内教育と先端技術を融合させてその課題を如何にビジネスに繋げられるかを自ら考えてもらうほか、地域共創の推進を目的。予選通過チームに起業に関する知見を持つ方からメンタリング実施。
本戦　１２月２２日（日）（Jr.ドクター育成塾、ガリレオの卵、ガリレオコンテスト発表会同時開催）

➡　スタートアップ人材の育成へ



外部有識者会議

福井高専の現状と課題

本校の概要（総務・企画主事）
本校の教育（教務主事）
総括（校長）
将来構想と改組

令和6年9月5日（木）
於：福井工業高等専門学校　大会議室

Since 1965 Creativity and Curiosity
福井高専

18. 学科改組計画の概要

【学科等改組の目的・必要性】 ⇒ 既存５学科を１学科５系９コース へ再編成（令和８年度入学生から）

持続可能でウェルビーイングな未来社会を実現するために、他分野の知識を有機的に結び付けて広い観点から問題解決をデザインできる人材の育成を目指している。そのために、**１学科５系９コース**へと改組して、分野横断型教育を推進するとともに、社会変革の原動力となるAI・IoT・データサイエンスといった**高度情報技術教育**を充実させて「**総合知**」を創出できる人材の育成を効果的に行う。

【産業界・地域のニーズ】

【産業界のニーズ】
・企業の**DX化のニーズは大きい**が、**DX化が遅れている**現状があり、その主因は人材不足。
※※※、強化した者が最も重要デジタル技術等を利用した生産の効率化　60.4%
「効果的な問題と対応策を見出す能力」「データを活用する能力」「顧客ニーズを理解する能力」
・企業が求めるDX化を推進する人材は、**データを有効活用できる人材**および**データ取得環境を構築できる人材**。

【地域のニーズ】
・**中学生対象の高度情報技術の学習意思を調査**結果、「**とても学びたい**」「**学びたい**」が**95%**以上となっている。また、過去5年間の電子情報工学科の入試倍率は学校平均を上回っており、中学生の**情報技術への学習欲求は大きい**。

【福井高等の情報教育の特徴】
・DCON優勝(R3)、プロコン競技部門優勝(R5)など多数の実績
・数理・データサイエンス・ＡＩ教育プログラム(リテラシーレベル)採択(R4)

【企業・大学等アンケート】
・**令和5年度の求人倍率**は平均**50倍**程度あり、5学科各分野の人材ニーズは大きく、各系の専門性を維持しながら、高度な情報技術を修めたDX推進人材が求められている。
・本校が令和6年に実施した**地域企業へのアンケート**において、本校の**高度情報教育導入**を「**歓迎する**」が**73%**となるなど、高度情報教育へのニーズは大きい。
・**令和5年度 卒業生・修了生アンケート**(103社・校)では、卒業生の評価として「**専門能力**」はほぼ十分以上が **94%**、「**技術者に必要なデザインマインド**」もほぼ十分以上が**92%**となっており、本校の専門教育の質は高く、デザインマインドを適切に育成できるカリキュラムとなっている。

【学科等改組の概要】 改組後の構成 **未来社会デザイン工学科 1学科5系9コース制**

現行の5学科を、**1学科5系9コース**に**改組**し、**4**つの系に専門分野を深く学ぶ「**専門探究コース**」と、各専門分野においての高度情報技術の活用を学ぶ「**情報融合コース**」を設置する。コース分けは２年進級時に行う。

現行5学科　（定員200名）

- 機械工学科（40名）
- 電気電子工学科（40名）
- 物質工学科（40名）
- 環境都市工学科（40名）
- 電子情報工学科（40名）

改組 → 未来社会デザイン工学科

1学科5系9コース（定員200名）

- 機械系
  - マシナリーシステムコース(30名)
  - ｍマシナリーシステムコース(10名)
- 電気電子系
  - エネルギー・エレクトロニクスコース(30名)
  - ｅエネルギー・エレクトロニクスコース(10名)
- 材料・生物系
  - グリーンマテリアルコース(30名)
  - ｇグリーンマテリアルコース(10名)
- 都市・建築系
  - アーバンデザインコース(30名)
  - ｕアーバンデザインコース(10名)
- 情報系
  - コンピュータサイエンスコース（40名）

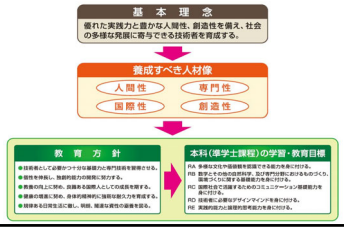
一般科目教室 → リベラルアーツ科 → 文理横断を推進

【取組の要点】
・**専門融合型高度情報人材の育成**：各専門分野における問題をAIや統計的な手法によって解決できる人材を育成するために、専門教育に加えて、実践的にデータ分析するスキルを学ぶ**AI・データサイエンス教育**を導入した**情報融合コース**を設置する。
・**基礎情報教育の拡充**：本校独自の**エンジニアリング・データサイエンスプログラム(R6開始)**を学科横断型授業により実施し、基礎情報技術とともに情報を**デザインマインド**を養成する。
以上の取組により、**数理・データサイエンス・ＡＩ教育プログラム(応用基礎レベル)へ申請予定**。

19. 養成すべき人材像（現行）

【基本理念】
優れた実践力と豊かな人間性、創造性を備え、社会の多様な発展に寄与できる技術者を育成する。

【養成すべき人材像】
(1)地球環境に配慮できる社会的責任感と倫理観を持った技術者 (人間性)
(2)科学技術の進歩を的確に見通す工学的素養を持った技術者 (専門性)
(3)調和と協調を意識して、国際的に活躍できる技術者 (国際性)
(4)幅広い知識を応用・統合し、豊かな発想力と実践力で問題解決できる技術者(創造性)



20. 養成すべき人材像（申請中）

【基本理念】
優れた実践力と豊かな人間性、創造性を備え、未来社会の多様な発展に寄与できる技術者を育成する。

【養成すべき人材像】
(1)地球環境に配慮できる社会的責任感と倫理観を持った技術者 (人間性)
(2)科学技術の進歩を的確に見通す工学的素養を持った技術者 (専門性)
(3)調和と協調を意識して、国際的に活躍できる技術者 (国際性)
(4)好奇心と探究心を源に、革新的なアイデアを提案できる技術者（創造性）
(5)複数の学問分野の技術を応用・統合し、問題解決できる技術者（学際性）

【教育方針】
(1) 技術者として必要かつ十分な基礎力と専門技術を習得させる。
(2) 個性を伸長し、独創的能力の開発に努力する。
(3) 教養の向上に努め、良識ある国際人としての成長を期する。
(4) 健康の増進に努め、身体的精神的に強靭な耐久力を育成する。
(5) 規律ある日常生活に徹し、明朗、闊達な資性の涵養を図る。

21. 学習・教育目標（申請中）

≪本科(準学士課程)≫

RA　多様な文化や価値観を認識できる能力を身に付ける。
RB　数学とその他の自然科学、情報処理、及び専門分野におけるものづくり、環境づくりに関する基礎能力を身に付ける。
RC　国際社会で活躍するためのコミュニケーション基礎能力を身に付ける。
RD　技術者に必要なデザインマインドを身に付ける。
RE　情報を駆使する実践的能力と論理的思考能力を身に付ける。

《専攻科課程》

JA　地球的視点から多様な文化や価値観を認識できる能力を身に付ける。
JB　数学とその他の自然科学、情報処理、及び異なる技術分野を含む問題にも対処できる、ものづくり・環境づくりに関する能力を身に付ける。
JC　国際社会で活躍する技術者に必要なコミュニケーション基礎能力を身に付ける。
JD　技術者に求められる基礎的なデザイン能力を身に付ける。
JE　実践的能力及び論理的思考能力を総合的に身に付ける。

22. 特色的なポリシー・制度・教育課程（申請中）

① 1学年では系、コースを考慮しない混合学級として多様な価値観を学ぶとともに、専門基礎科目を設けて、早期から専門人材としての自覚を根付かせる。

② 学際カリキュラムにより系・コース横断型の共通科目でデザイン能力を養成する。

③ 数理・データサイエンス・AI教育プログラム（応用基礎レベル）認定を目指したカリキュラムを学科全体で実施することで、基礎情報技術を身につけさせる。

④ 各系に情報融合コースを設けて、各系の専門分野において高度情報技術を活用する能力を育成する。

⑤ ４学年の学生ほぼ全員に企業・公的機関・大学でのインターシップに参加させ、実践的に社会的自立心を育成する。

⑥ すべての学年において国語、英語を実践的に学ぶ科目を配置し、５学年では様々な人文・社会科学系科目を配置するなどして、文理横断して広い視野を涵養する。

23. 機械系 教育課程表（申請中）

必修科目	共通	材料力学Ⅱ		2				2	
		熱力学		2				2	
		伝熱工学		1					1
		流れ学Ⅰ		1			1		
		流れ学Ⅱ		2				2	
		工業力学		2				2	
		機構学		1				1	
		機械設計法		2				2	
		自動制御Ⅰ		1					1
		振動工学Ⅰ		1					1
		センサ工学		1				1	
		電気工学		2			2		
		電子工学		2				2	
		機械製図		4		4			
		機械設計製図Ⅰ		3			3		
		機械設計製図Ⅱ		2				2	
		CAD・CAE		1					1
		機械工作実習Ⅰ		4		4			
		機械工作実習Ⅱ		3			3		
		メカトロニクス実習		1			1		
		機械工学実験		2				2	
		卒業研究		9					9
		修得単位計		74	6	12	20	22	14
	探究	知能機械演習		2				2	
		マシナリーシステム実験		2					2
		修得単位計		4				2	2
	融合	★プログラミング基礎(導入科目)		1		1			
		★IoT基礎		1			1		
		★IoT実習		1			1		
		ロボット創造演習		2				2	
		ｍマシナリーシステム実験		2					2
		修得単位計		7		1	2	2	2

コース別に修得すること

24. 専門探究コース／情報融合コース（申請中）

目		電気工学		2			2		
		電子工学		2				2	
		機械製図		4		4			
		機械設計製図Ⅰ		3			3		
		機械設計製図Ⅱ		2				2	
		CAD・CAE		1					1
		機械工作実習Ⅰ		4		4			
		機械工作実習Ⅱ		3			3		
				1			1		
				2				2	
				9					9
		修得単位計		74	6	12	20	22	14
	探究	知能機械演習		2				2	
		マシナリーシステム実験		2					2
		修得単位計		4				2	2
	融合	★プログラミング基礎(導入科目)		1		1			
		★IoT基礎		1			1		
		★IoT実習		1			1		
		ロボット創造演習		2				2	
		i-マシナリーシステム実験		2					2
		修得単位計		7		1	2	2	2

専門探求コース

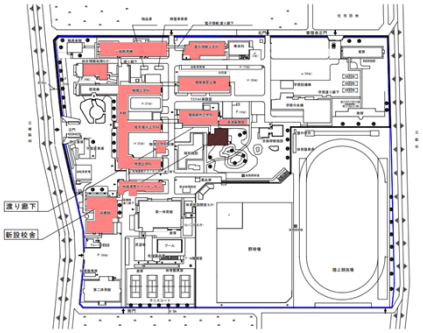
専門探求コース

25. 学際カリキュラム（申請中）

学際カリキュラム（サイエンス・エンジニアリング・デザイン）	必修科目	共通	数理・データサイエンス入門		1				1		
		探究	プロジェクト演習		1				1		コース別に1単位修得すること
		融合	情報プロジェクト演習		1				1		
			修得単位計		2				2		
	選択科目		#※$_1$ロボティクス		1					1	1単位以上修得
			※$_1$電力エネルギー工学	A	1			1			
			※$_2$データエンジニアリング基礎		1					1	
			※$_3$情報・制御基礎	A	1			1			
			※$_4$センサ材料工学		1					1	
			※$_5$分子・材料設計基礎	A	1			1			
			※$_6$先端分子・材料設計		1					1	
			※$_7$空間情報工学	A	1			1			
			※$_8$地盤防災工学		1					1	
			他大学等科目（学際）		1				1		
			修得単位計		1以上			1以上			
	修得単位計				3以上			3以上			
修得単位合計（卒業認定必要単位数）	探究	学際カリキュラム除く			86以上	6	12	20	24	21以上	
		学際カリキュラム含む						68以上			
	融合	学際カリキュラム除く			86以上	6	13	22	24	18以上	
		学際カリキュラム含む						67以上			

26. 施設整備（申請中）

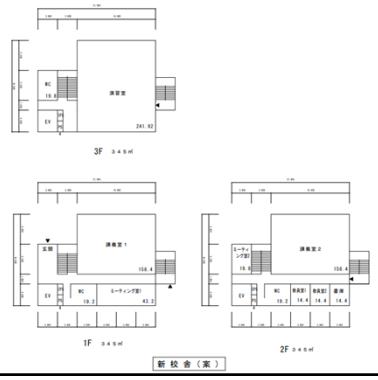
(3) 校舎、運動場の配置図（完成年度のもの）



福井工業高等専門学校　配置図

27. 施設整備（申請中）

(4) 校舎の平面図（完成年度のもの）　※新校舎以外の建物については現段階での教室名で表示



28. 令和7年度 創立60周年に向けて

外部有識者会議

福井高専の現状と課題

ご清聴ありがとうございました。

令和6年9月5日（木）
於：福井工業高等専門学校　大会議室

Since 1965 Creativity and Curiosity 福井高専

令和６年度「外部有識者会議」報告書

発　行　　独立行政法人国立高等専門学校機構
福井工業高等専門学校
〒916－8507　福井県鯖江市下司町
電話　0778－62－8296
FAX　0778－62－2597